目撃証言における凶器注目効果の検証

○山田恭子¹・緒本翔平(非会員)・中條和光¹

(¹広島大学大学院教育学研究科)

キーワード: 凶器注目効果 目撃証言 不適合説

Weapon focus effect on eyewitness testimony

Kyoko YAMADA¹, Shohei OMOTO[#] and Kazamitsu CHUJO¹

(¹Graduate School of Hiroshima University)

Key words: weapon focus effect, eyewitness testimony, unusualness

目 的

凶器注目効果とは、犯罪場面で凶器を持った人物を目撃した場合、その人物の人相や着衣に関する記憶が抑制される現象である (Loftus, Loftus, & Messo 1987)。この効果を検証した Pickel (1999) は、拳銃を持った男性 (ターゲット: 条件操作の対象) が女性 (非ターゲット: 統制としての記憶項目) に接近する様子を描写した動画を用いて記憶実験を行った。その結果、ターゲットの外見的特徴についての記憶が抑制され、凶器注目効果の生起が確認された。また、Pickel (1999) の研究では、拳銃を持った人物の出現が不自然な野球場条件と自然な射撃場条件を設定し、ターゲットについての外見的特徴の記憶成績を比較している。その結果、ターゲットの外見的特徴についての記憶成績は、射撃場条件よりも野球場条件において低かった。Pickel (1999) はこの結果を、日常ではありえない状況で凶器を目撃することで凶器に選択的注意が向けられ、周辺情報の符号化が妨げられるために効果が生起したと解釈した (不適合説)。

本研究では、凶器には日本の犯罪場面で多用されている刃物を用いて Pickel (1999) の追試を行い、凶器注目効果の生起が確認できるか検証する。

方 法

刺激と計画

包丁を持った男性 (ターゲット) が画面外から女性 (非ターゲット) に接近し、やりとりする様子を描写した、約 65 秒間の無音の動画を用いた。凶器は、後半の約 33 秒間登場した。不適合条件では背景を教室、適合条件では台所とした。従って、要因計画は対象 (ターゲット/非ターゲット: 参加者内要因)、不適合性 (教室/台所: 参加者間要因) の 2×2 の混合計画であった。

参加者

大学生 172 名であった。不適合条件に 91 名、適合条件に 81 名を無作為に割り当てた。

手続き

実験は集団実験であった。参加者に記憶実験であることは教示せず、スクリーンに映し出された動画を細心の注意を払って見るようにのみ教示した。動画終了後、妨害課題としてクロスワードパズルに 10 分間取り組ませ、その後、記憶テストに約 10 分間回答させた。テストは、ターゲットと非ターゲットそれぞれの外見的特徴に関する再認 5 問、手がかり再生 3 問 (各 1 点、計 8 点) に加え、自由再生 1 問 (正しく再生された特徴につき 1 点) からなっていた。最後に、動画の見え方や登場人物について、内省報告を求めた。

結 果

内省報告より、“特定の記憶方略を用いた”、“動画内に知人が登場した”、“何らかの要因で動画がよく見えなかった”のいずれかを報告した者に加えて、凶器の包丁を認識できな

かったか、別のものと誤認した者のデータを分析から除外した。その結果、分析の対象となったのは不適合条件 22 名、適合条件 29 名であった。

参加者別に対象ごとの全質問項目の得点を算出し、条件ごとに平均記憶得点を算出した (Figure 1)。分散分析を行ったところ、対象の主効果 ($F(1, 49) = 9.01, p < .005$) と不適合性の主効果 ($F(1, 49) = 23.26, p < .001$) および交互作用が有意であった ($F(1, 49) = 6.30, p < .05$)。

Figure 1. 対象別の平均記憶得点 (誤差線は標準誤差)

下位検定の結果、不適合条件においてのみ、対象の単純主効果が有意であった ($F(1, 49) = 13.35, p < .005$)。このことから、不適合条件においてのみ、ターゲットに関する記憶成績が非ターゲットに関する記憶成績よりも低いことが明らかになった。適合条件では、これらの間に差はなかった。

考 察

Pickel (1999) では、不適合条件において適合条件よりもターゲットに関する記憶成績が低いことによって凶器注目効果が生じたとしている。本研究の結果は、刃物を所持した人物の登場が非日常的な状況である不適合条件においてのみ、ターゲットに関する記憶成績が非ターゲットに関する記憶成績よりも低かったというものであった。しかしながら、凶器を所持していない非ターゲットに関する記憶よりも凶器を所持していたターゲットに関する記憶が抑制されていたため、凶器注目効果は生起していたと考えられる。

本研究の結果は、日常ではありえない状況で凶器を所持した人物が登場するという、文脈との不適合が目撃者に凶器への選択的注意を生じさせ、凶器注目効果が生起するという不適合説によって解釈が可能であると考えられる。

引用文献

- Loftus, E. F., Loftus, G. R., & Messo, J. (1987). Some facts about “weapon focus.” *Law and Human Behavior*, 11, 55-62.
 Pickel, K. L. (1999). The influence of context on the “weapon focus” effect. *Law and Human Behavior*, 23, 299-311.